

佐賀のがばいばあちゃん

2006(平成18)年5月18日鑑賞<試写会・梅田ブルク7>

★★★★



監督＝倉内均／原作＝島田洋七／出演＝吉行和子／三宅裕司（特別出演）／鈴木祐真／池田晃信／池田壮磨／工藤夕貴／浅田美代子／山本太郎／緒形拳（特別出演）／島田紳助（友情出演）（ティ・ジョイ配給／2006年日本映画／104分）

……漫オブームの火付け役となったB & Bの島田洋七が書いた自伝小説がベストセラーとなり、遂に映画化。そして全国ロードショーへ……。『がばい』とは佐賀弁で『すごい』ということ。吉行和子演ずる『がばいばあちゃん』の名言集だけでも十分面白いが、『子育て論』の教材としても最適。それにしても、『貧乏』って悪いものではないということを、あらためて再確認……。



島田洋七が全国制覇へ！

この映画の原作は1980年代初頭の漫オブームの火付け役となったB & Bの島田洋七の自伝小説。彼は1951年生まれだから、1949年生まれの私とほぼ同世代。したがって、彼が小学生の時、佐賀の『がばい』ばあちゃんの家に残されたのは昭和30年代。高度経済成長時代が始まろうとしていた時代だったが、ばあちゃん宅は貧乏生活もいいところ。しかし、そんな貧乏生活の中で、『がばい』ばあちゃんから多くのことを教わった彼の自伝小説はベストセラーとなり、遂に映画化。当初、九州方面だけで部分的に上映されていたものの、人気は人気を呼び、遂に全国ロードショー公開されることに……。ベストセラーの原作とともに、映画も全国制覇へ！



広島から佐賀へ

岩永明広（池田晃信）は兄と2人兄弟。父親が原爆症で死亡したため、母親

(工藤夕貴)が居酒屋を経営して懸命に働いているが、「甘えた」の明広は、母親恋しさに「来てはいけない」と言われていたお店を訪ねることも……。女手ひとつでお店を経営しながら、小さい子供2人を育てることが難しいと悟った母親は、弟の明広を佐賀の実家で今なお1人で生活しているばあちゃんに預けることに。その引き取り役をしたのが、母親の姉の真佐子(浅田美代子)だが、母親は明広にまだその事情を説明していなかった。今日は、真佐子が佐賀へ帰る日。散々真佐子に甘えていた明広は、「見送りに来てくれ」と言われ、機嫌よく駅のホームで、母親とともに真佐子を見送っていたが、発車直前、母親は明広を列車の中に。事情のわからない明広に対してやさしく説明する真佐子だったが、明広はただ泣きじゃくるばかり……。

吉行和子ばあちゃんに注目！

この映画最大の注目点は、吉行和子演ずるばあちゃんの「がばい」ぶり。「がばい」とは佐賀弁で「すごい」ということらしいが、何が「すごい」のかというと、たくましさや明るさ、そして前向きな姿勢。腰に巻いた紐の先を地面に垂らし、そこにつけた磁石で、歩きながらくず鉄を拾ったり、家の裏を流れる川の水面に張った棒に上流のスーパーから捨てられた食料品を引っかけて拾ったり、とその生活力のたくましさにはビックリ。「川はうちのスーパーマーケット」と言って、あっけらかんと笑う「がばい」ばあちゃんに、明広はあっけにとられながらも徐々に同化……。朝4時に起き、火吹き竹を使って火をおこしてのご飯炊きも明広の日課となったようだが、意外とそんな生活も悪くないもの……。この映画は、全編を貫くこの吉行和子ばあちゃんの「がばい」ぶりが最大の注目点！

貧乏ぶりが第2の注目点！

第2の注目点はその貧乏ぶりだが、この映画を観ていると貧乏も悪くないものだと思えてくる(?)から、不思議なもの。小学生も高学年になれば、男の子たちはスポーツをやりたいと思うもの。とりわけ学校の成績がとんと良くない明広は、その傾向が強かった……。

剣道を見れば剣道を、柔道を見れば柔道だと思うものの、それをばあちゃんに言うと「やめときんしゃい」との答え。その理由は簡単。お金がかかるから……。しかし、かわいい孫のスポーツをやりたいと思う気持ちを無視するだけではダメと考えたばあちゃんの「提案」は、タダでできるスポーツ、すなわち走ること。そして、そのとどめは、「靴を履いて走ってはダメ」。なぜなら、「靴がちびるから」というもの。

根が単純な明広(?)は、この言葉にしたがって毎日運動場を走っているうち、いつしか学校1番のランナーに……。多分、それによる足腰の鍛え方が良かったのだろう。小学生仲間の草野球でピッチャーをつとめていた明広(池田壮磨)は、中学校に入ると野球部で大活躍(鈴木祐真)。3年生が退くシーズンには、遂に主将指名が……。それにしても、あの小太りの島田洋七がホントに中学生時代、野球部のキャプテンをしていたの……。まあ、原作を読んでみれば正確なことがわかるはずだから、興味のある人は是非どうぞ……。

興味深い名言集

ソクラテスやアリストテレスなど古代ギリシャ時代の名言や中国の孔子や孟子などの名言は、今でも数多く残されており、時として結婚式のスピーチなどに使われることも……。しかし、名言集は歴史的に有名な人物たちだけの専売特許ではない。夫の死亡後7人の子供を育て上げ、今も現役の掃除婦として働き、古い家で1人生活している佐賀のがばいばあちゃんにも、「なるほど」と感心させ、生活に根ざしたさまざまな名言集が……。たとえば、①「人に気づかれないのが本当の優しさ、本当の親切」、②「悲しい話は夜するな。どんなにつらい話も、昼したら大したことはない」、③「今のうちに貧乏しとけ。金持ちになったら大変よ。よかもん食べたり、旅行にいったり、忙しか」などは、名言中の名言……。小学生の時から、ごく自然にこういう名言集に接していれば、子供はスクスクと育つのは当然……？

自伝小説の限界も……？

昨年は『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年)が、昭和30年代の古き良きニッポ

ンの時代を描いて大ヒットした。私の大好きな『カーテンコール』（04年）も、その流れの1つ。そして、この映画も、昭和30年代初頭の佐賀の田舎町における貧しい暮らしが明るく描かれており、郷愁と共感の気持ちを持って楽しく鑑賞でき、観客がスクリーンと一体となって、笑いと涙を誘う出来となっている。現に、ほぼ満席となったこの日の試写会では、島田洋七と倉内均監督からのあいさつに対して、盛んに拍手がくり返されていたうえ、上映終了直後には、あちこちのおばちゃんたちからすすり泣きの声が聞こえてくるとともに、期せずして大きな拍手が……。私もそういう意味でいい映画であることは十分認めるものの、他方では、『ALWAYS 三丁目の夕日』や『カーテンコール』に比べると、物語のダイナミック性という面ではやはり明確なレベルの差が……。それは、所詮自伝小説の映画化であるため、当然の限界だろうが……？

2006(平成18)年5月22日記

ミニコラム

SHOW - HEY 少年に人生を教えてくれた人は……？

06年夏・甲子園決勝戦の早実 VS 駒大苫小牧は全国民注視の中、延長15回引き分け再試合となった。そこで私の記憶が蘇ったのは、37年前に私が故郷松山で観た松山商業 VS 三沢高校の決勝戦。井上 VS 太田の手に汗握る投げ合いに地元校を応援する市民はテレビの前にクギ付けとなり、松山市内には人通りがなくなった。私がそれを観たのは、松山への帰省時実家に戻るより先に訪れていたJ夫妻の家。中学・高校時代、受験勉強に反発し、あまり良い子でなかった私は、映画館通いや将棋の勝負に熱中していた。そんな私のやんちゃな行動を素直に認めてくれたJ夫妻の家は、自宅よりよほど居心地

の良い場所。その一人娘は今は京都に嫁いているが、今でも私のことを『涙そうそう』の「にいにい」ばりに、「章平にいちゃん」と……。新聞記者だったJ氏は不摂生な生き方がたたったのか働き盛りで亡くなったが、今は娘の嫁ぎ先で同居しているJ夫人は80歳近くになった今でもチョー元気。別に特別な人生訓をたれてくれたわけではないが、何よりも自由を求めている私の少年時代を1番理解し、応援してくれたのがこのJ夫妻だった。今は松山のおばちゃんから京都のばあちゃんとなったJ夫人には、この先ずっと長生きしてもらいたいものだ。

2006（平成18）年11月20日記